

〔研究会報告〕

関東地区例会報告レビュー

「カンボジアにおけるマレー世界の展開—『チャム人』の移住と活動の再検討」

遠藤正之（立教大学大学院博士課程後期課程）

レビュー執筆者・久礼克季（立教大学大学院博士課程後期課程）

7月8日、立教大学において本年度第2回目のJAMS関東例会が行われ、遠藤正之（立教大学大学院博士課程後期課程）により「カンボジアにおけるマレー世界の展開—『チャム人』の移住と活動の再検討」の報告が行われた。

本報告は、現在カンボジアに居住する「チャム人」のカンボジアへの移住やこれに関連した「チャム人」の活動をとりあげたものである。遠藤は、現在カンボジアの「チャム人」が「チャンパーの末裔」という一般的定義でいわれている意識を持たず、「チャム人」＝ムスリムという意識を強く持っていることに注目する。そのうえで、『カンボジア王朝年代記』をはじめ多くの同時代史料を用いて、15世紀から18世紀における「チャム人」のカンボジアへの移住を再検討し、さらに移住した「チャム人」の活動も明らかにしていった。

報告のなかで、遠藤は次のように指摘する。カンボジア国内には、移住によって15世紀までにかかなりの数の「チャム人」が存在していた。15世紀後半、「交易の時代」が展開し東南アジア海域世界の活動が活性化するなかで、米や森林生産物を産出するカンボジアは、中国、日本、そして海域世界と広範なネットワークを形成するに至る。これに伴い、15世紀のカンボジアにおいて、移住した「チャム人」と交易目的で来航したマレー系諸族が次第に結びつき、「マレー世界」が展開することになった。このような彼らに対して、カンボジア王権は、彼らを「チャム・マレー」と呼び自らと一線を画す。そして両者の間には、マック・プアン（MAK Phæun）による先行研究で指摘されているような単純な「平和的・生産的」関係ではなく、状況により結びついたり離反したりするような関係が存在していた。この背景には、カンボジア王権がシャムやベトナムなどに比べて弱体であり、「チャム人」やマレー系諸族が特に交易面において自由に活動できる余地が大きかったという要因があった。以上のように展開されたカンボジアの「マレー世界」は、「交易の時代」が終了した17世紀末以後も、シャム湾沿岸地域に来航する華人やブギス人、ミナンカバウ人と結びつくことによって部分的には19世紀まで継続したのである。

本報告に対し、まず、コメンテーターである北川香子よりコメントが述べられた。北川は、カンボジアにおける「チャム人」の現状を踏まえて次のように指摘する。すなわち、東南アジア大陸部に位置しながらメコン川やトンレサップ湖という大きな内水面を持つカンボジアでは、「チャム人」は現在は主に漁民として活動し、また古くは水牛や丸木舟の商人として活動することでメコン川上流域のタイ東北部やラオスといった地域とも関係を持っていた。またその一方で、彼らは歴史的に王権とつながりが深く、現在でも、全国会議員に占めるチャム人議員の比率は、カンボジア総人口中に占めるチャム人の比率よりも高

い。この2点から、カンボジアにおいて「チャム人」は、人数的にはマイノリティではあるが大きな影響力をもった民族集団といえる。これらのことを考慮した場合、カンボジア王権と「チャム人」が状況により結びついたり離反したりするような関係にあったという遠藤の主張には問題がある。しかし、カンボジアの「チャム人」に関する先行研究がマック・ブアンによる諸研究のみであるという現状を考慮すれば、遠藤の研究は非常に興味深く今後大いに可能性のあるものである、とも北川は述べた。

このような報告ならびにコメントをふまえた討論では、主に報告で対象となった時期や現在のカンボジアにおける「チャム人」のイスラーム化、言語や教育、外部とのつながりに関することに質問が集中した。そしてこれらに対し、遠藤の回答や北川の補足では次のような説明がなされた。すなわち、イスラーム化については遅くとも15世紀までには始まり、現在も進行中である。また現在カンボジアの「チャム人」は、主にクメール語とチャム語を話し、両者を状況によって使い分けているが、その一方でイスラーム化と関連してルーミー（マレー語）やアラビア語の教育も併せて行われている。そして外部とのつながりについても、イスラーム化の影響を受けマレーシアやアラブ世界との関係が深くなっているのである。以上のような説明を受け、さらに、次のような問題も提起された。すなわち、まず、報告の対象となった時代や現在の「チャム人」の状況に関しては、上からの政治的な面からの問題と下からのプライベートな面からの問題の双方から捉える必要があるのではないか。そしてまた、「チャム人」の中にも重層性があり、対象となっている人物がその中でどのカテゴリーに入るかを考える必要があるのではないか。このような問題にまで議論は進んでいった。

以上のような報告、コメント、討論から、本報告は、カンボジアにおける「チャム人」の過去ならびに現在を考えるうえで非常に興味深い内容を含んでいるといえる。そしてまた、このカンボジアにおける「チャム人」というテーマは、エスニシティの形成に関する諸問題を解明するうえでの大きなヒントを提供しうるものであり、その意義は非常に大きいといえるだろう。今後の更なる研究の進展を期待したい。

